ホワイトリエール９０５

美舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ホワイトリエール９０５

【Ｎコード】
Ｎ３８２３Ｘ

【作者名】
美舞

【あらすじ】
呪われた国リッカセイテン
国が誇る魔法学校とある研究広間に時空が歪み
都内某所　高層マンションの一室の玄関が繋がった。

リッカセイテンに必要なのは
中の住民？それとも家？
２０代後半ちょっとひねくれていてヲタク臭のする柳井千尋
彼女は国に何を伝えるのか

騎士が居間でトト〇に見入ってる
王子が従者を相手に格ゲーしてる
姫と待女はＢＬ本に夢中

余計なものを持ち込んだ気がしないでもない。

こんな状況で
呪いを救えるのか・・・・・

つうか・・・救う気があるのか？

（マンションの一室でおこってるドタバタ劇メイン）

※逆ハータグを逆ハーにしたいタグに変更しました。
作者的には逆ハー（予定）なのですが　ラブ要素が薄い気がするので・・・

1（前書き）

処女作。やっちまった感満載です。やってみたかったんです。
生温かく優しいまなざしで見てやってくださいまし。
地味に下ネタでてくる（予定）なので１５禁
呪われた国などと言ってますが、戦闘などは書けないのでまったり
ほのぼのゆるいギャグ系の予定です。

1

・・・

・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

「ちぇ　何もおきないじゃん」
「そうだな…」
「失敗か？」
「えーつまんなーい」
「まあ、こんなとこだと思ったぜ」
「大惨事になるよりマシですね」

呪われた国リッカセイテン
王宮に隣接された魔法学校の第５研究広間
そんな会話がされてたのは２４時間前
広間の壁が異常な発光をし　そこから扉がひとつ現れた
その異変に気がついたのは
大陸でただ一人
「ふふふっ　やっと来たね」

リッカセイテンに呪いをかけた張本人だけ。

６人は寝込んでいた。
熱があるとかお腹が痛いとか頭痛がひどいとか怪我だとか
そういうのではない。
ただただダルイ。動けないのだ。
魔力を根こそぎ持っていかれたような感覚
指一本動かすのも　瞬きするのさえも　体が言うことを聞いてくれない。
自分の体なのに思い通りに出来やしない
ベットからまったく動けない
寝がえりすらうてないが、寝てるしかない状況

なぜこんなことになっているのか・・・
考えられるのは昨日の魔法陣
動けない６人が導いた答えは
失敗したと思っていたそれしかなかった。
だがしかし　動けないので
それについて話すことも考えることも何もできず
ベットの上で寝てるしかなかった。

王宮は騒がしかった。
いや・・・正確には普段の方が騒がしいのかもしれないが・・・
隣の魔法学校と言うなの更生施設が静かなのだ。
いつも朝から聞こえる爆発音悲鳴怒声笑い声が聞こえない

あの問題児６人が寝込んでる！！！
静かなのは大変ありがたい事なのだが

この６人は厄介なことに
リッカセイテンの第４王子を含む各国の重要人物ばかりなのだ。
まあ、呪われた国に預けられるくらいの問題児だが
国政においてはそんなこと関係ない。
一応、一応ではあるが客人
なにかあったら大問題。

少ない待女達と従者達は走り回っている。

そんな様子を見ていた国王は
第１から第３王子達に面倒事を全部押しつけた。

2

くふっくふふふふw

リビングを掃除しながら、柳井千尋は浮かれていた。
そりゃあもう・・・浮かれてた。

5日の有休と土日各2日、祭日を合わせた１０連休！！！！！
この１０連休の為に色々なものと戦った。

有給届けを上司に提出した時「お前…　本気か？」と数回聞かれ
先輩には嫌味を言われ　同期には呆れられ　後輩の目は冷たかった。
「退社の前の有休消化じゃない？」などと社内で噂され
「休み明け出勤しても席なかったりね。」などと給湯室で言われた
日々

ったく　有休をちょっと取ったくら何だって言うのよ。
皆出たがらない休日出勤も出たし　夏休みは人の合間をぬって飛び
石だったし
雑用も人の嫌がることも自分からやったんだ。
たまの連休くらいいいじゃない！！！と無理やり開き直った。

そんな面倒臭い日々も昨日まで
連休明けたあとは　また少し嫌味を言われるかもしれないけれど
そんな事を気にしていたら　この１０日間楽しくない。
とにかく今日から連休だw
旅行も人に会う事も・・・なんの予定も入れていない！！
引きこもりお一人様万歳の時間

思いっきりダラダラしたい。
読む暇のなかった本を一気に読んだり　ネットで朝までチャットしたり
思う存分動画を漁ったり　積みゲーを攻略したり
ゲームのコントローラーを握りしめたまま寝ちゃうよ？

昼夜逆転生活

…なんて幸せなんだろう。

一人暮らしには少し大きい３ＬＤＫのマンション。
これはろくでなしの父親が唯一私にくれたもの
あんな父親からの恩恵なんて・・・と思った時期もあったが
そんな気持ちはとっくに持っていない。
固定資産税と管理費だけで住めるのだ
大変ありがたい。

玄関脇に右の部屋は段ボールが山積みでいっぱいになっている。
生活用品、食べ物などでも重い物日持ちのするもの（水、酒、米カップ麺など）を
ネット通販で調子こいて　まとめ買いしすぎた結果がこうなった。
１０日間外出しなくても　正直困らないだけの物資はある。
まあ・・それでも買い物欲は衰えなかったわけで…
連休の初日は宅配便の受け取りをしつつ軽い掃除で終わった。

お腹空いたな・・と思った時　時計は正午をさしていた。
ん~本屋に寄って　その後静かな喫茶店で本を読みながらブランチ。
ケーキとコーヒーでデザートまで堪能したら
そのまま買い物して　カレーを作って2日くらいカレーのみで過ごすか。
…でも　ちょっとお酒も飲みたいなあ。
惣菜を何個か買ってつまみつつビールでも飲むかな。
カレーは明日でもいいか。ま　スーパーでその時考えようっと
そんな事を思いつつ　財布、カギ、携帯、タバコを入れたエコバックを持ち玄関を出る。

嘘

出ない。

正確に言えば一瞬出ようとしたけど　一歩も外に出ずに扉を閉めた。

「?」

もう一回そーっと　扉を開く

????????????

頭が？でいっぱいになったので　扉を閉める。

ドアスコープを覗いてみた　さっき見た光景しか見えない。

・・・おかしい。

玄関を外にでるつもりで開いた（普通だよね）

いつもだったら扉を開けると　ふわっと外の風や匂いを体感する

玄関開けたら室内。　とか…ないわぁ。

落ち着いたブラウンを基調とした部屋・・というには広めだったけど部屋があった。

ついさっき宅配便を受け取った時はいつもの景色だった。

この数分でなにが起こった？

いやいやいや

起こってたまるか…たまるもんか。

疲れてるのかな？

昨日までの残業がやっぱ響いてるのかな？

うん。そうだ　きっと疲れてるんだ。

自分が思ってる以上にひどい疲れで　ちょっと幻覚が見えただけだ。

そう言い聞かせても　もう1度玄関を開けてみる自信がない。
また室内とか見えても困る大変困る。

…ちょっと落ち着こう。
カップ麺でも食べてひと眠りしようかな。

浮かれてた気分も一瞬で沈む
まったく何が起こってるのかはわからないが

千尋は少しでも落ち着こうと・・タバコを吸いにリビングへ戻った。

3（前書き）

1話1話が短いです。話がまったく進まないです。ごめんなさい。

3

美しい銀色の髪、少し吊りあがった切れ長の瞳は青くなんとなく冷たい印象を受ける。
自室の隣にある執務室
リッカセイテン騎士団　団長にして第一王子の肩書を持つ
ケイトアベルは机に肘をつき面倒臭そうに書類を眺めていた。

ちっ・・・なんで俺様がこんな事に時間を費やさなきゃなんねえんだよ。
クソガキ共が多少寝込もうが別にいいじゃねえか…
静かな方が平和でいいって何の問題もありゃしねぇ
このままでかまわねえ気もするが……だ

「リッカセイテン第４王子キシリハウラー、他５名
体調不良の原因究明、治療、それらに関わる全ての責任を
騎士団団長　第一王子　ケイトアベル
魔法師団団長　第二王子　レヤンナジーグ
外交大使補佐官　第三王子　ニマウハサリ
上記３名に任せる。
リッカセイテン４８代目国王」

簡潔な文ではあるが　ご丁寧に国王の印まで押してある。
完全に無視することも　忘れてたwテヘ♪　なんてしらばっくれることもできやしない。

あんの…クソ親父…たいして働きもしねえくせに、こんな時ばかり仕事が早い…

誰かに聞かれでもしたら不敬罪に問われてもおかしくないセリフだが
彼は脳内で国王に毒づいていた（今日だけで7回目）ので誰にも気
づかれる事はなかった。

銀色の長い髪、後ろで一本に束ねていてもその輝きは失われない。
切れ長で少しグレーかかった青い瞳　妙に色っぽい印象を受ける。
第一王子に似ているはいるが　向こうは泣き黒子、第三王子には口
黒子
色香の違った美男　第三王子ニマウサハリは城の中庭にあたる庭園
で佇みながら思っていた。

兄達がなんとかするだろう。…と　見事な他力本願である。

いっその事バカ6人を殺してしまった方が早いんじゃないか？
流行り病、大実験の上の事故死
呪いを患ってこじらせた…（この国の呪いはそういうもんじゃない）
など別に理由なんか何でもいい。
外交大使補佐なんて肩書があるから　死んだあとは多少忙しいかも
しれないが
なんらかの責任を大使が取って退任したら
俺が補佐から大使になればいいだけ

大使になるのは面倒臭いが、遅かれ早かれその立場にいつかはならなきゃならない。
少し時期が早くなったとこで・・この際それくらい仕方ないかもな。
んー特に問題ないんじゃないか？
…今なら簡単に殺せそうだなぁ。
兄達に6人を押し付けられたらそうしてしまおう。
それが1番手っとり早い。

他力本願か　殺すかの2托しか彼には思い浮かばなかった。

青みがかった黒い髪、ゆるいウエーブのかかった長い髪は
少し印象が違えば重い印象を受けるはずなのにまったくそんな印象
はない。
バイオレットの瞳、薄い唇、こちらもなかなか色っぽい美男である。
第二王子レヤンナジーグは魔法学校第五研究広間で悩んでいた。

これは・・・なんだろう・・・・。

この国で一番生真面目な王子である彼は他の王子達より先に一人で
（勝手に）
６人の元を訪れていた。
そこで見た６人には、魔力がほぼないことに気がついたのだ。

こいつら昨日なにかしたな。

余計なことをなんかやらかした・・って事だけはわかった。

そして訪れた研究広間。
６人そろってやらかす　としたらここしかないだろう。と
１から順番に見て回った
そしてこの第５研究広間に来た時異変に気がついた。

ドアがある。
見たこともない形式のドア……　いつの間に！？建て替え工事を？？
などと一瞬思ってしまったが　そうじゃないだろうと自分に言い聞かせ

なるべく落ち着きつつそのドアを観察する。

そこで気がついた　左上の所にあるそれ

大きくはない長方形の板みたいなもの。
それに何か書いてある。

これは・・・何を意味するんだ？

ただ表札に「柳井」と書いてあるだけなのだが
もちろんそんなもの読めない彼は
その「柳井」の文字に見入ってた。

文字なのだろうか。絵なのだろうか。

レヤンナジーグはその事で頭がいっぱいになっていた。

3（後書き）

内容うんぬんよりも名前を考えるのが苦手です。自分で付けといて覚えられません。横文字ネーム苦手なんですよ。
内容はゆっくりすぎですがじわじわ進みたい。進めばいいなあと思ってます。

次くらいにそろそろリッカセイテンの住民（の誰か）とヒロインを対面させたいです。

4

リビングに戻ると千尋はおもむろにタバコをくわえた。
手に嫌な汗をかいている。
…いや、手だけじゃない全身にその汗を感じる。
カチっカチとライターに火をつけようとするがなかなかつかない。
この汗のせいだろうか…
チャイルドロックでやたら着火しにくくなったライターのせいだろうか。

ああっもういらつく！！！
少しでも落ち着こうとタバコを吸いにきたのに・・
ライターまで思うようになりゃしない。
マッチだな。マッチ。

リビングに置いてある籐でできたダークブラウンの引きだし
そこに細かい物をなんでも突っ込む千尋は
引きだしからスナックの名前が書いてあるマッチを取り出した
力の入れ過ぎでマッチを数本無駄にはしたが
やっとタバコに火を着けることができた。

ふううううううううううううう

愛用しているタールの低くないメンソールのたばこを
思いっきり肺に吸い込み　吐き出す。
体に悪いしお金はかかるし　部屋はヤニで茶色くなるし　人には嫌がられるし
まったくろくなものではない。百害あって一利なし　とは良く言ったもんだと思う。
しかし、悲しいかな…わかっていても辞められないのが喫煙者…

千尋は煙を吐き出しながら　窓の外を何気なく眺めた。

…あれ？違和感を感じない。

玄関を開けたときは多大なる違和感を感じた（当たり前だ）のに
窓の向こうはいつもと同じ景色。

９階のこの部屋からの景色は気に入ってる。
天気の良い日は富士山が見え　寝室の窓からは小さいが都庁と東京タワーが見える。
夜景も朝焼けもキレイで　季節になればとある花火大会なども見えた。

うん。窓の外はいつもと一緒と思いながら窓を開けベランダに出る。

あ…ダメ…　また違和感…

風が・・・ない・・・だと？

普段から突風とまではいかないが　風のない時などなかった。
匂いも外の匂いを感じられない　感じられるのは温かい日差しだけ
午前中に干した洗濯物も風になびいている様子はなかった。

マンション脇の道路では普通に車が流れているし人も動いてる。
信号だって普通のタイミングで変わる
空を見れば　雲も流れていくし　鳥も飛んでるのがわかる。

普通の　ごく普通の日常がそこにある。

なのに…なんでだ…

自分だけそこから隔離されたような感覚。
ベランダがビニールハウスにでもされたような・・・
日差しだけ感じて　他のことは感じることができない。
風も匂いもなければ・・・音すら聞こえなかった…

無音、気がついた時はそれが恐くなった。
普段の生活ではＴＶをつけない時の方が多いし
音のない空間は嫌いではない。

でも…人の生活音　車の音　風の音　すべてがまったく聞こえない
本当の無音。

さっきの嫌な汗がまた吹きあげてきた気がし
両腕を自分で抱え　自分で自分を抱きしめる。

なんか・・すごく恐い。
なにかが起こってる気がする。
なに・・なんなの！？

ＴＶ・・そうだ　ＴＶ着けよう。
無音とか気にならなくなる。
誰かの笑い声でもニュースを伝える声でも作られた音でかまわない

急い電源を入れたＴＶには「受信できません」の文字が浮かぶだけだった。

呆然としたその瞬間
「ドスンッ」と大きな音が玄関の方から聞こえ
千尋は　心臓が止まるんじゃないか？と思うほど驚いた。

玄関にゆっくり歩み寄る。
この外では何か良くないことが起こっている・・と
なんの能力も持たない頭ですら危険を察して警告してくる。

でも・・・　行かなくちゃ・・・・

逝きたくはないけど　行かなくちゃ・・・

息を殺し　そおおおおっと玄関のドアスコープを覗いた。

目があった

文字どうりである。

目があったのである。

誰かがこちらを覗いていた。

千尋は　またもや心臓が止まるほど驚いた。（本日2度目）

5

ひっ　と驚き後ずさった。

痛い！！！心臓がこれでもかってくらい痛い！！

びっくりした・・なんてもんじゃない。

声を出さずに我慢したのは褒めてもらいたい。

つうか・・驚きすぎて声も出なかったっと言った方が正しいが。

驚きすぎて　死ぬかと思ったよ・・・

これはやばい。絶対やばい。何がやばいって、

全てがやばい。これ以上にないくらいやばいって・・・・。

あーーーーぁ　っもう　思考回路がうまく動かない。

ドアスコープ覗いて　人の目があった・・とか

都会で聞くある意味現代版怪談話のひとつじゃないか。

恐いものなんていっぱいあるけど

生身の人間が1番恐いって・・・

…ストーカー？

いや　まて　もうすぐ産まれて29年になったりするが

そんな被害あったこともなければ　他人の視線なんて感じながら生きたこともない。

え・・じゃぁ　泥棒？
土曜の昼間に大胆に玄関から入る泥棒・・？
あんな大きい音出すだろうか・・・？

つうか、その前に玄関先が広間になってたあれはなんだ・・・？
そして・・人の目・・・バイオレットの瞳だった。
見たことのない色をしていた。カラコンにしても趣味が悪い（余計なお世話）

何にも考えず宅急便のお兄さんにハンコを押してた時間が懐かしい。
まだ３０分くらいしかたってないけど　マジで懐かしい。
戻れるなら戻りたい！！ってーの。

いや　マジで・・・・。

第五研究広間のレヤンナジーグはまだ悩んでいた。
左上の木の板のことはもういい（早い）
いくら見てもなにを意味してるのか答えが出なかったのだ。

次に視点が移ったのが　ドアの取っ手部分

見たことのない形式ではあるが特別に変わったことはなさそうに思う。
怪しさ満点だが・・思うしかなかったのだ。

手にとって見ようとしたのだが　触れることが出来なかった。
取っ手の部分に触ろうとして、数回手が空を切ったので簡単に諦めた。
（表札も同じように触ることができなかった）

ちょっと・・屈辱だ・・・なんて思ったのは内緒

しかし少しイラついたので
簡単な攻撃魔法陣を書き　ドアに向かって発動してみる。
ドアに向けたその魔法
なぜだか急に方向を変えたように見えドアの脇に当たり
広間の壁に少しだけ焦げ跡を作った。

解せぬ。

なぜだ！！！！！！！！！
私の魔法陣は完璧だったはずだ！！！
なぜ的を外した・・・・？
納得いかない。
あんなにはっきり見えてるのに幻術かなにか？
それであれば取っ手に触れないのもわかる。
しかしそんな術の気配はないのだ・・・

レヤンナジーグは眉間に皺を寄せドアにもう1度近付く

ドアの中心より少し上の部分に丸い…ぽっち？
なんだこれは…
たかだかドアを1つ見つけただけなのに
なぜこうもわからないことばかりなのだ。
そしてその丸いぽっちらしきものを好奇心で覗いた。

真っ暗で何も見えなかった。

…もういい。

なんだか色々ムカついてきた。

あの馬鹿６人に昨日何をしたのか聞けばいい。
動けない・・とか魔力の枯渇とか
そんなのどうでもいい。
今の私の疑問からは　彼らの体調などどうなろうとかまわない。

いや・・第４王子ならどうしたっていいだろう。
他の５人は　一応客人だから　手出しはやめておこう。

レヤンナジーグは眉間の皺を深くしながら
キシリハウアーの部屋に向かった。

5（後書き）

レヤンナジーグは生真面目ですが短気です。

6（前書き）

やっと未知との遭遇

6

人間パニックになったら何をするかわからない。

携帯を開きミクシ〇でつぶやくか・・ツイッ〇ーでつぶやくか…
ヤ〇ー知恵袋で相談するか…
千尋は真剣に考えてた。

「玄関先が広間になってました。ドアスコープを覗いたら紫の目がありました。
どうしたらいいでしょうか？」

どうもこうもない。

「貴女はイカレテます。病院をお勧めします」

そんな答えがきて終わりる。

だがそれをすることはかなわない。
携帯を開いたら　圏外　になっていたのだ。
家の中ではトイレ以外3本バリバリたっていたのに…
本当に・・この家に何が起こっているのだろうか。
いつも暮らしている部屋なのに
私と部屋以外・・・何かがおかしい。おかしすぎる。

ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああ
もおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
わけわかんない！！！！！！！！！！！！！

女は度胸！！！！　なるようになる！！！

千尋の頭は完全にキャパシティーオーバーになっていた。
なにかが急にふっきれた。メーターいっぱいふりきってしまった。
まるで深夜にちょっとお酒を飲んで
余計なゲームをネット通販でノリでうっかり買ってしまうようなテンション
朝起きて後悔するあれと一緒である。

彼女はこの後の行動をやっぱり後日後悔したりしなかったりする。

もう一度玄関にゆっくり近づき　音を立てないようにドアスコープを覗く。

良かった・・・　目はない。

ふぅと深呼吸して　ゆっくり外を眺める。

やっぱりダークブラウンを基調とした広間
右奥に大きな窓があり、左壁の方には本棚
あまり良くは見えないが　なんとなくそれは認識できた。

人・・の気配は・・・なさそう？

あのバイオレットの瞳は・・なんだったんだろうか。

もう　立ち去ってくれた？

さっきの大きい音が気になる。
玄関を破壊されてでもしたら恐い・・・

ちょっと外を確認したいな…

ちょっと、ほんの少しだけ…

千尋は　ドアチェーンを付けたまま　ゆっくりそぉーっと玄関を開いた。

「ガシッ」「ガンッ」　２つの音と共に
ドアの中心あたりに手が掛けられ　下の方は黒いブーツみたいなも

のが挟まれていた。

「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ

めっちゃ驚くって！！！心臓止まるわっ！！！殺す気か！ばか！」

きゃあああ　などと可愛い悲鳴は口から出ない代わりにそんな言葉が出ていた。

反射的、必死にドアを閉めようとしたが、開けようとする力の方が強い。

「おい　お前・・は・・・」

その言葉に反応して　ドアの隙間を見ると
そこには　銀色の髪　グレーかかった青い瞳
今まで見たこともないような美男子と目が合った。
全体像が見えるわけでもないのに　ほんの少ししか見えていないのに
「美男子」とわかる整い方
それは自分の世界の人間ではない…となんとなく思ってしまった。

今まで拒否してきた思考。

まさか…トリップ？

いあいあいあ。勘弁してよ

無理だ　そんな設定　無茶ぶりもいいとこだ。

うん。違う。トリップなんかじゃない！！！！！

そんなわけあるわけないじゃんw

ちょっと顔が整いすぎてて　ナルシスト入ってる人のコスプレだってw

きっとそう！そうに違いない！！　そうじゃなきゃ困る！

正直、無理な設定ではあると思うが　そう思わずにいられない

だがしかし　千尋は気付いてしまった。

ドアを押さえている手

細く長く白く綺麗なその指は　６本あった。

見なきゃよかった・・・・そんなとこ・・・・

6（後書き）

ダラダラして進まない。ごめんなさい。

7

・・・見間違い。キノセイ。作画崩壊。

さて　どれだ？

見間違いが一番妥当よね。私　あわててるし　今正常じゃないし・・・

指が6本とか・・・見間違いだ。

あれだ・・・指に見せかけたナニカだよ。きっと。

ナニカはまったくわからないけど…

一瞬ひるんでしまったのは仕方ないはず

その瞬間を相手は見逃さずに

内側のドアノブを握っている私の手を隙間か捕えた。

「聞きたい事があるんだけど、ちょっといいかな？」

え・・・なにこれキャッチ？セールス？

「家は結構です。間に合ってます！！　じゃ・・」　って

ドアをもう1度閉めようとしたけど　手は銀髪に捕えられたままで

なすすべがない。

「君・・・・この世界の人間ではないよね？」

開いた口が塞がらない　ってこういうことだろうか。
何言いだしちゃってんのこの人…

へーそうなんだ。と頷くか
ああ、やっぱりね。と納得するか
んなわけあるか！ってキレるか
ハイハイ　と適当に流すか
……で？っていう・・・みたいな。

私からの言葉を待っているのだろうか。
キレイなブルーグレーの瞳はこちらを離さない。

こんなイケメンに手を捕えられ　瞳を逸らさないで見つめられるなんて・・・・・

ダメだ。

萌えない。

ちょっと頑張って現実逃避してみようと思ったけど
いかんせんこの状況は頂けない。
手も瞳も　即効離してほしい。
無理だ。色々ついていけない。

この世界の人間ではない　　ってなんだ。
どの世界のお話ですか・・・？
元々突っ込み体質ってほどじゃないのに
さすがに突っ込まずにはいられない。

「君は・・・誰だい？なぜここに居る？　このドアは君の部屋のものかい？このチェーンはなに？」

矢継ぎ早の質問に

「なぜここに居る？・・・のかなんて・・・こっちが聞きたいくらいよ！！！
　貴方は誰？この広間はなんなの？どうなってるのよこれ・・・」

質問に質問で返すのは　あまりよろしくはないだろうが
私だって　彼の言う「ここ」っていうのがどこの事なのか。
彼は何者なのか。聞きたいことは沢山ある　ぜひお答え願いたい。

彼ならこの状況を説明できるのか？
今　何が起こっているのか？

「・・・　ちょっと落ち着いて話がしたいんだけど　このチェーンを外してもらえないかな？」

「出来るだけ穏便でわかりやすく簡潔に、
なおかつ（私の心に）優しく納得のいく話ならしたいです。それ意外は嫌です」

「（我儘だな・・）　女性には優しくするよう心がけているさ。悪いようにはしないから・・・」

どっかのナンパ師のような安いセリフであるが
千尋はそれに頷き　チェーンを外し　ドアを大きく開く

玄関先でご対面

イケメン様ご降臨である。

隙間から見えていたのよりも・・・はるかにイケメンである。
銀色の髪を後ろでひとつに束ね　ブルーグレーの瞳　口もとの黒子
肌は白く　背も高い　やや細身の印象は受けるものの
なんて言うか・・・・色っぽい。

元から勝負なんて挑んでいないけど・・
なんて　いうか・・・・　負けだ。
完敗だ。完敗

あんなフェロモンでねえよ。
むしろ出せてる人間を見たことがないよ。

それに対して
ロンＴ　パーカー　デニム　ラフ度１００％
すっぴン度　８０％
まったく持って　並んで良いレベルの話じゃないｗｗ
Ｌｖマックスの勇者に挑んだ町人Ｄくらいの域
つうかただのモブ。

千尋はまたドアを閉めたくなった。

8（前書き）

呪い

8

とある国の話をしよう。どこにでもある話さ

もう３００年前になるのかなぁ。まあ　だいたい２～３００年前の話だと思う。

その国の気候は穏やかで　海と山、森もあり自然に囲まれた裕福な国だった。
国の北側に白く大きな森があってね　そこにその国のお姫様が迷い込んだ時があったんだ
当時そのお姫様は少し遠い戦国の王から側室に・・っていう打診があり
それに嫌がった姫は何も考えずに逃げようとしたんだろうね。
「白い森」そう呼ばれているけど　本当に白いわけじゃない。
森の奥深くに建っている白い塔　誰もそこまで辿りつけたことのない塔
もしかしたら誰かがたどり着いてるのかもしれないけど・・
戻ってきた人間がいないんだ。確認しようがない。
白い塔を囲う森　で　白い森。
姫はそこを目指したのか　ただやみくもに森を歩いたのか　誰かがそこへ導いたのか
どうにかその塔へ辿り着く。そこで１人の若い男と出会うんだ。

その若い男と姫は約束をする。

戦国の王を倒してくれたら姫はその男の妻になる・・と。
もちろん姫はそんなことできやしないと思ってた。
若い男・・若いだけで　やぼったく薄汚い感じがする。
側室なんてプライドが許さないけど、この国は戦ではかなわないのはわかっている
何もせずにいられない。でも自分ではなにもできない。
誰かなんとかして欲しい。
その気持ちだけで　姫は若い男と交わした約束

姫を側室に娶りに来た戦王
それを一瞬で消した若い男

文字通りである　一瞬で消したのだ。
王も従者も護衛の騎士達も馬車も手土産に持参した宝石さえも・・・・
それどころではない　戦国そのもの全て　消し去ったのだ。

戦王を倒して欲しいと願ったのは姫。
それを叶えたのは若い男。
妻に・・・と迎えに来た男を姫は激しく拒絶した。
彼の風貌がどうの・・などという問題ではない。

何もかもを瞬時に消すような　「未知なる強すぎる力」　恐怖でしかない。

国王もそれを見ていた国民もそれを見ていた。

若い男に対する感情は「恐怖」でしかない
しかし約束を破ったら　あの力が　今度はこちらに向かってくるかもしれない。
国王は姫を差し出す方向で話しを進めた。

そしてそれを嘆いた姫は　国王と若い男の前で　自害する。
若い男の周りに風が吹いた。
さっきまでやぼったく薄汚い風貌だった彼は見たことのない男に変わっていた。
黒い髪　赤い瞳　すらっとした身長にマントをはおり
うすら笑いで　短剣で胸を突き真っ赤に染まった姫を見下していた。
「ふぅん。僕の元にくるのが　そんなに嫌だったんだぁ　自害するくらいなら・・
僕の手なんか煩わせないで　最初からそうしてればいいのになぁ。
女って勝手だねぇ　つまんないなあ。オモチャなくなっちゃったじゃない」
「き・・きさま・・・・何者だ・・・・」
王様はもう動かない姫を抱き寄せながら　男と必死に対峙する。
「別に何もんだっていいでしょ。労働の報酬がなくなっちゃったから、ちょっと今ムカついてるんだよ　ね。お前らなんかと話したくもない。黙っててよ」
男がそう言うと　王は口が聞けなくなる。
「あ、つまんないからさ　呪いかけていい？つうかかけるからw」
そう言って彼は消えた。
どんな呪いをかけるのか　あるいはもうかけたのか・・・

王はそれを知るすべがなかった。

ただ・・その呪いはゆっくり国を浸食していった。

この国は女性が少ない。
居ないわけではない「少ない」のだ。

女性は男児であるならば　何人でも産める。
女児の場合　母体か女児のどちらかしか残れないようになっていた。
母体を助けると女児が・・・女児を助けると母体が・・・
必ずどちらか片方しか生きていられないのだ。
この国の息子には母親がいるが　娘には母親は生存していないことになる。
女性が命を落とすのは　なにも出産だけではない。
出産で　1＝1になり死亡するなら人口的に数は減らないが
事故・怪我・病気　色々なことで亡くなる場合もある
1＝0　になってしまうと　ゼロはゼロのまま　決して増えることはない。

自分の妻や娘を失いたくない貴族達は　こぞって国を出て行った。
他の国で出産すれば・・・と　結果やはりどちらかしか残れなかった。
じゃあ、男には呪いはないのか？と思えば
他国で結婚した男性の妻は　やはり女児を残して死亡した。
そして　その娘が大きくなり結婚して・・同じ道をたどった。

初めは偶然かと思われたそれもちゃんと調べ研究してみると
４世代目まで　皆他国へ行ってもその呪いは消えることはなかった。
反対に他国からこの国へ嫁いだ場合もわっかりやすすぎるほど呪い
は有効で
じわじわと・・この国を侵していく

呪いを嫌い他国へ移住する事は少なくない。
むしろ仕方ないとさえいえる。
女性もこの３００年でだいぶ減った
妙齢の男子達は嫁を探し　この国から出て行くのも多い。

ただし・・・居なくなったぶん・・老人は増えた。

海と山　自然の恩恵に恵まれ　気候の穏やかなこの国を
老後に・・・と　子育ても終わり孫も生まれ
呪いなぞどこ吹く風の　悠々自適な老人達が
やたらこの国へ移住してくるのである。

この国へ一歩足を踏み入れたら　その呪いは即有効で
誰もこの国へ来ようと思わない
他国からくるのは　厄介者か変わり者の２托。
老後なら住みやすいけかもしれないけれど
それまではこの国に関わるのは止めといたほうがいい。

この大陸の者なら　誰もが知ってるお話さ。

呪われた国　リッカセイテン

9

・・・なんでこんなことになっているのでしょうかね。

銀髪のイケメン様が
リビングのソファーに座ってコーヒーと睨み合っていらっしゃいます。

いあ　この状況になるまでに　結構すったもんだありましたよ？

なんでも玄関から外に出るな！！とかなんとかおっしゃいましてね
じゃあ、不本意だけど家に・・・ってあがってもらおうとしたんです。

人の家の玄関を見たイケメン様は「狭い」だのなんだも文句をたれやがったり
土足で上がりこもうとしたのを必死で止めたり
勝手に色んなドアを開けようとしてるのをどうにかやめさせたり
物珍しそうに何でも手にとってみようとするのをなだめたり

・・・なかなか面倒臭いイケメン様でございます。

どうにかこうにかソファーに座らましたよ。
頑張った自分に拍手を送りたいくらいですよ？
マジで大変だった・・・

とりあえず飲み物でも・・・とキッチンに立ったけど
何を出していいのか　一瞬考え込んみましたよ。
だってイケメン様ってばなんだか色気とともに高貴なオーラを漂わせてきやがりましてね。
「高貴」とかそんなもん関わった事なかったですし
異世界とか言ってやがりますから・・何が普通な飲み物なのかわかりかねるし
銀髪6本指のイケメン様が何を好まれるのか？なんて知ったこっちゃないですし
結局自分の飲みたいものを出してみました。
まあ・・よくよく考えたら　コーヒーとか見たことない人種からしたら
ちょっとハードル高かったかなあ。
ミルクとお砂糖入れてお好みでどうぞwなんて出したって
コーヒーの元の味を知らないと好みの味とか作れないよね。
イケメン様はブラックのコーヒーを試しに一口飲んだ後・・・
コーヒーを睨んでおりますのよ。苦かったのかな？おほほほほ。

えっ　私が悪いの？
だって飲みたかったんだもん。
今日は喫茶店でコーヒー飲む予定だったし・・・
・・・麦茶あたりの方が　ハードル低かったかなあ？

「本当に・・・君は・・・異世界の人間なんだな」

「えっ　異世界とか・・本気なんだ・・・。」

「ああ、僕の世界では・・こんな奇妙な飲み物はないし、部屋がこんなに狭いこともないし、
部屋が珍妙な物で溢れかえってることもないし　女性が君みたいな格好をしてることもない」

「・・・・ちょっと馬鹿にしてます？」

「いや。そう聞こえたのなら謝るよ。でも僕らの世界からしたら事実さ」

（全然謝ってないし・・・）

「私の世界じゃこんなの普通ですよ？そりゃあ・・ちょっと人様の家より物で溢れかえってるのは
認めますけど・・・　ごくごく普通の生活基準です」

「ふむ。こっちの世界じゃコレが当たり前なんだろうね。よくわからない物に囲まれ・・・
魔術の効かないこの空間が・・・普通なんだね。」

「よくわからない物・・とか・・・私にとっては生活必需品ですよ？
・・・・・・・ってか　魔術ってなんですか！？」

「君の世界では魔法は存在しないのかい？」

「しないですよ。当たり前じゃないですか・・・」

「当たり前ねえ・・僕らの世界じゃ普通に存在するよ？現に僕はここで魔術を使おうとしてみたんだ。
・・・・・不発に終わったけどね」

「なに勝手に恐い事してやがるんですか！！！！」

「いや、害はないやつだよ？僕そんなに魔術得意じゃないし　ちょっと試しに・・ってやつさ」

「・・・試しもなにも止めてください。部屋が爆破とか本気で困りますから！」

「そういえば自己紹介がまだだったね。僕は
リッカセイテン国の外交補佐官ニマウハサリ・シュナイザー　一応第３王子　よろしくね」

！！！！！！！！！
王子ときたよｗｗｗ王子とかきやがりましたよｗｗｗ
つうかリッカセイテンって　どこぞそれ・・・・

「今更な気もしないでもないけど・・・柳井千尋です。日本って国に暮らしてます。
今もそのつもりです！」

「や・・な・・い？でいいのかな？それとも　ち・・ひろ？」

「や　な　い　でお願いします」

「了解。僕はニサリでいいよ。」

「いえ・・お断りします」

「えwなんで！？」

「第3王子とやらなんでしょ？そんな人　気易く呼べませんよ。」

「いや　ここではそんな肩書関係ないだろ？ニサリでお願いするよ。敬語もなしね。

それとも・・・僕が‘お願い’してるのに聞けない・・とでも？」

あ、なんか一瞬ブラックが見えた・・・・・・・

「・・・・はい。ニサリ　　これでいい？」

「よくできたね。じゃあ　ちょっと君を何故　ドアから出させなかったのか

そこから説明しようか」

「あ、うん。お願い」

そしてニサリはゆっくりとリッカセイテンの呪いについて語り始めた。

一歩でも足を踏み入れたら・・・その呪いは有効だと聞かされた。
私は・・・どうなんだろう？
玄関の向こうはリッカセイテンだと言う。
でも窓の外の景色は日本だ
じゃあ・・この家は？
日本にあるの？リッカセイテンとやらにあるの？

その呪いとやらに・・・私もかかってしまったの？

その不安が顔に出ていたのだろうか
ニサリはうっすら笑いを浮かべて

「子供産んでみればわかるんじゃない？」などとのたまわった。

「・・・・・・・・なにその意味のわからない検証方法。
女児産んで死んだら　呪いにかかってました～
生きてたらかかってませんでした～って・・・
検証時間長すぎるわ！！！　つうか誰の子孕めっていうのよ・・」

「そんなの俺の子でいいじゃん？女児産まれたら引き取って王女にするよ？
リッカセイテンで女性は貴重だしね。」

「なんで命を賭けた呪い検証にニサリの子供産まなきゃいけないのよ・・・」

「だって女児が産まれればリッカセイテンにはありがたいし
君が死ねば　この面白そうな部屋も僕のものになるだろう？
一石二鳥じゃないｗｗ」

笑顔でニサリはそう言うと二人掛けのソファーで私を押し倒してきた。

をいをいをい　本気か・・・・おまえ・・・・・

ちょ　まじむり

まじで無理だからあああああああああああああああああああああああああ！！！

私の叫び声は外に出ることはなかった。

ニサリに唇を奪われていたから・・・・・・・

いくらなんでもその展開はないと思った（泣）

9（後書き）

ニマウハサリの考え方は極端です。

10

私の１０連休初日はろくでもない事のオンパレード
あれか？地味な負け犬女は連休なんか取らずに
ずっと仕事でもしてろ！！っていう誰かの呪いですか？嫌がらせですか？
そーですか。呪いですか。。。。

リッカセイテンの呪いなんか知ったこっちゃないよ。
私自信、今、この状況が・・・呪われてるとしか思えないって！！！！

頭を片手で固定しつつ体重をこちらにかけ人の唇をむさぼってるニサリ
銀髪がさらりと落ちてきて顔をくすぐる。
酸素を求め　手から抜け出そうとしてもすぐに追いかけきて
唇をはずしてはくれない・・・・。

初めは抵抗しようとしたけど
力技では　やはり男性にかなわない。
まあ・・ニサリの場合　力技＋早技でした
あいてる両手で押してみたけど　びくともしませんでしたよ。
線が細そうに見えてもさすが男ってやつですね。

だからって別にあきらめちゃいませんよ？
まあ、唇の方は諦めました。
イケメンとのキスくらい別に思い出の一つに数えてやりますよ。

そんなこともあったわねぇ　ってくらい過去の事として忘れてあげます。

だけど・・・貞操は守りぬいてやります！！！
いくらイケメンとはいえ　こんな簡単に会って1時間とかで
体を許すわけないじゃん！！！！！！
唇は・・・許しちゃってるけど・・・・・

こいつの子供とか・・・絶対に産まねぇ

後でニサリには　ブラックコーヒー一気飲みの刑ですよ。
慣れないカフェインで　夜とか眠れなくなればいいんだ！！！！！

宙をさまよっている右手は　コーヒーの置かれてるテーブルまでぎりぎり届く
テーブルのはじっこには　いつも並べて置いてあるリモコンそう。リモコン。
さっきＴＶは受信しなかったけども　電源は入った。
レコーダーのリモコンを探り寄せる。

んーなんのＤＶＤがセットしてあったかなあ。

なんだったけ・・・・

あーわかんない・・・・

ちょっと・・・

気持ちいい・・・・・・

なんて思っちゃいけない！

ニサリのキスは濃厚なものに変わっていて　人の口内を勝手に犯してるけど

そんなの答えてやる義務なんてない　絶対その舌に答えてなんてやらない

そう思っていても

久々のキスは・・どこか気持ちが良くって・・思考を持って行かれそうになる。

ニサリの左手が　おかしな動きに変わった。

人の体をまさぐり始める。

思考を持っていかれてる場合じゃない！！！
ちょー危険　めっちゃ危険
ヤバいヤバいヤバい

ＤＶＤは何がセットされてるか思い出せないけど
この際仕方ない。
私はボリュームを最大限に大きくしてから
レコーダーの再生ボタンを押した。

「げ～こぉ～くぅ～じょ～だぜえ～　つ～～ぶぅ～せぇ～～～～～」

そんな歌が爆音で流れる。

某テニス漫画原作のミュージカルだった。しかも途中から・・・・

「のぉ～しあがるぜぇ～」

きゃーひ〇し～ｖｖｖ

なんて言ってる場合じゃない。
大音量すぎて何を言ってるかなんてわからないほど音割れしてるけど
私には全部わかる。これが愛か・・・？（（（

ニサリの手は止まってた。
もちろん唇も離れてる。

表情的には　「ぽっかぁーん」の域だ。

その間に私はソファーから抜け出し　キッチンに口をゆすぎに向かった。

ニサリは耳を押さえながら

「おい！」

「おおい！！！！　騒がしい！！！！　これはなんだ！！！！」

と叫んでた。

私にとっちゃニサリの方がやかましいっての・・・・。

次のもしもの事を考え　キッチンでさりげなく包丁を探す。

この家で武器になるものなんてない。

包丁しか思い浮かばなかったのだ・・・・

刺したことも刺されたこともないけど

もう絶対押し倒されたくなんかない。

レコーダーの音量を少しさげ　（消さないわよ?見てたいもん）

包丁を握りしめた時

玄関が開いた気がした。

１０（後書き）

テ〇ミュは作者の趣味の１つです（どーでもいい情報）

11（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。めちゃくちゃ嬉しいです。

11

ワイワイ　ガヤガヤ　ドタバタ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・何事デスカ？

今日はもう何があってもいい加減驚かない！！くらいの気持ちはあった。

玄関先は知らない場所で　ドアを開けたらイケメン様で
異世界だとか言われ　呪いを聞かされ

その上襲われかけた。

もう充分でしょ？

女は度胸！なんて言い聞かせたけどね…

開き直るのも限度ってもんがあると思うの。

・・・・・・・飲んじゃおっかな？

私がキッチンで包丁を握った時
玄関の方で音がした　気がした。
ＤＶＤの音が大きくって　良く聞こえなかったけどね。

？となった時には

ワイワイガヤガヤドタバタ・・と　人が入ってくる気配
複数かよっ！！！！

ハサリ１人でも勝てるかどうかわかならい状況なのに
これ以上増えますか・・・・・
勝手に入ってきやがりますか・・・・

もう・・・マジで　飲んじゃおっかな。

自宅なのに　大好きな自室なのに・・・
こんなに家に居たくないって思うことがなかったくらい

今　ここに居たくない！

肉体的に無理なら精神的にだけでも
酔っ払って意識飛ばしちゃダメですかね？
その間にハサリに襲われかねない危険性はあるからそんなことできないけどさぁ
襲われないで済むのなら　この場でキッチンドランカーになってやるのに！！！！
意識飛ばす事ができるなら、料理酒だって飲んでやります。
そうちょっと人がやさぐれ始めた時　ハサリが玄関へ向かっていた。
ＤＶＤの音量をかなり小さくおとす。
でもまだやっぱり消さない。
あまりに非日常的なことがわんさか襲ってくる中で
画面の中の（一方的に）見慣れてる彼ら達だけが心の寄り所みたいな状況になってる。
彼らの前で襲われたり　誰かを刺したり誰かに刺されたりなどとするもんか。
キッチンドランカーになったりもできない。そんな姿見せられない！（見えないけど・・・
（一方的な）想いだけど・・・好きってすごいな・・・・
「萌え」って　偉大！！！！
心の中でそう唱えながらガッツポーズを決めつつ

ニサリを後を追うように玄関へ出向いく。

そんなに広い家じゃないから・・別に出向かなくっても
会話聞こえてくるけどね・・・・・・。
家に上がりこむ前に　玄関先でその騒動を留めたい・・と心底願った。

「だぁーかぁーらぁー　靴は脱ぎなって！」
「ぬ。なぜここでは魔術が発動しない？」
「ねーこれなにー？」
「狭すぎる場所だな・・・・剣を抜かせにくくする為か！！」
「靴脱がないと　怒られるよ？」
「ふぬ・・魔術の効かぬ空間か・・興味深い」
「うわっ　なにこの部屋　箱がいっぱい。倉庫？」
「貴様ら！油断するなよ・・魔術も効かず剣も抜きにくい場所だ・・戦い難いからな」
「ちょ、狭いんだから順番で靴脱ぎなよ。」
「ねーねーこれ開けてみてもいいのかなあー？」
「脱いだ靴は、持ち歩くのか？」
「そこ置いといていいみたいだよ」
「置き場所などないではないか」
「ケイトの靴だけでいっぱいになるね。」
「足が大きすぎるからな」
「騎士の靴って無駄にごっついすぎるんだよ」
「ふっ　なんとかの大足っていうくらいだからな」
「ほう。ジーグそれは俺様に喧嘩を売ってるということでいいんだ

な？」
「喧嘩なんて利にならないもの売りはしない。事実を言ったまでだ」
「ジーグ！！きさまああああ　表へ出ろ！！！」
「ケイトだけ出ればいい。無駄に力は使う気ない」

これ・・・日本じゃなくって良かったなあ・・・・
絶対苦情きてるよね。隣近所に菓子折り持って平謝りしなきゃいけないとこだったな。
そのまま外に出て戻ってこなきゃいいのにな。
・・・なんでカギを閉め忘れちゃったんだろう。
面倒臭そうなイケメン×４と対峙しなきゃダメなのかな・・・・。
あいつら皆爆破しないかな。
などと意識がちょっと飛びかけた時

「で、ヤナイ　靴はここでいいのかぃ？」
とニサリがわざとらしく声を掛けてくる
その言葉に反応して残りの面倒臭そうなイケメン×３が
一斉にこっちを見てきた。

「コッチミンナ」

と本気で思ったのは仕方のない事だと思う。

11（後書き）

王子４人衆は協調性皆無です。

12

こっち見んな！！！！！！！っと思ったとこで何も変わりはしなかった。

脱ぎ散らかした靴を玄関と玄関脇に新聞紙を広げそこに放置する。

こんなにね・・・このリビングが狭いと思ったことはない。

2人掛けのソファーにニサリ、その隣に落ち着きなく座らされてる少年
はちみつ色の明るい髪　緑の瞳
緑とか・・出てきやがった。これが異世界クオリティーですか・・・・。

一人掛けのソファーにデカイけど銀髪と青い瞳のイケメン様
ニサリに似てるけどこっちの方が澄んだ青い目をしてる
ただ・・・態度は4人の中で一番大きい。

もうひとつの一人掛けソファーに　少し青みがかった黒髪、紫の瞳のイケメン様
忘れかけてたけど・・・この瞳って・・・さっきドアスコープで見

た目？
そうですか。イケメンでも覗き魔ですか。

私は居場所がないのでキッチンに移動してお茶の用意をする。
ここはまた・・コーヒー？
でもさっきニサリがなんとも言えない顔したしなあ・・・
普通に麦茶？日本茶？個人的にはほうじ茶が好きだけど、
あれ飲むと和菓子食べたくなるのよね。
お茶受け・・・。なにがいいんだろ・・・・。
まあ、自分から呼んだ客でもないから、飲み物だけでよね
面倒臭いし・・・・お菓子なんて
得意のネット通販で頼んだご当地ポテトチップス（名古屋手羽先味は意外に好き）と
「まずい」で話題になってたご当地ドロップしかない。
しかも納豆ドロップとかつぶしドロップととんこつラーメンドロップ、
どれも不味くってお土産に渡したのに相手から「いらない！！」と返却された逸材

・・・・・ドロップ舐めさせて見たいな。

でも一応、一応ではあるけどニサリ自称王子だし・・
この４人のやり取り見てると　皆同等の権力ありそうよね？
余計な事して怒らせるのも　まずい気がするし
普通のお茶だけで・・・我慢しよう。
淹れるの簡単だし紅茶で決定。Ｔパックで十分でしょ。
蒸らすとかしない　お湯に何回かちょいちょいッてやって色さえ変わればいい。

全部で5個か・・さすがに1個のTパックじゃきついかな？

てか、忘れてたけど、すごい空腹なんだけど一人でカップ麺ずすっちゃダメ？

紅茶の用意をしながらリビングに居座る4人を眺めた。

4人が4人ともイケメンすぎる。

この国の基本ってどんなんなんだよ！！！
あれか！普通の顔は死刑か！
平凡は悪ですか！コノヤロー！！！！
っと声を大にして言いたい気分になる

ニサリは好奇心でうずうずしているっぽいはちみつ色の少年を座らせとくのに手間取っているみたい。
態度の大きいイケメン様も部屋の中に興味はある見たいだけど
今の興味は・・・TV画面の中の映像みたいです。
テニ〇ュ見てるよｗｗｗ　釘付けだよｗｗ
えっと誰が気に入りましたか？
私の推しはひよ〇です。渡しませんよ？（（
そんな中　紫瞳の覗き魔さんが　席を立つ
窓を開けベランダに出て行く。
・・・タバコですか？部屋でもおkですよ？私も喫煙者だし
などと思いながら淹れ終わった紅茶をテーブルに運ぶ。

テーブルに紅茶をセットしていると
「ちょっといいですか？」ベランダの方から声が掛かる。
「はぁ・・・」

「なんでしょうか？」
「そんなにかまえないで下さい。ちょっと聞きたい事があるだけですから」
「は・・い」
「ここから見える外の景色が貴女の世界ですか？」
「ええ・・私の世界です」
「私達の世界とはずいぶん違うんだな・・・こんな高い所に人が住むなんてありえない、建物が密集し　すぎてるし、あの下でちょこまか走ってる物体はなんだい？空を飛ぶあの奇妙なものの動力は？
　あそこで3つの色が順番に光るのはなんの為？それから・・」
「ちょ・・ちょっとストップ。待って下さい。そんな一気に聞かれたって答えられないです」
「ああ・・すまない。少し興奮してしまったようだ。私としたことが恥ずかしい」
「いえ、少し驚きましたけど・・・私の国は人口密度が高いです。こういう風に土地を活用しないとい　けないくらいです。まあ・・地方行けばいくらでも土地は余ってるかもしれないですが
　この辺りではこんなもんですよ。走ってるのは車　人が乗って素早く移動する乗り物ですね。
　空を飛んでるのは飛行機です。動力うんぬんは良く知りませんけど　車と同じでエンジンっというも　のを積み燃料を使って動いてるはずです。順番に光ってるのは・・信号のことですか？
　路を通るのもあれで順番に通ってるんですよ」
　おおざっぱすぎる回答だとは思うけど・・こんなもんでいいかな？

「ふぬ。魔術はない・・と聞いたが　私達とは違う力を使ってるんだな。文明がここまで違うか。」
「私はまだそちらの国を見ていませんが・・まったく違う文明なんでしょうね」
「ああ。まったく違う。あとあそこの建物の上に書いてある文字・・と絵か。あれななんの為だ？
ダッ○引っ越しセンター・・？」
「企業・・会社の広告看板です。ああやって目立たせて人の目に着くようにしてあります」
「私がこの家に入る前に貴女の家のドアの横に長方形の板みたいなものに何か書いてあったが・・
看板か？」
「いあいあいあいあ。それは表札と言って　ここに誰誰が住んでます　みたいな表示です」
「ではあれは・・貴女の名前か？」
「はい。やない　と言います」
「やないか。私はレヤンナジーグと言う。よろしく頼む」
「はぁ・・よろしく・・です」
「この家に入る前その表札に何が書いてあるかわからなかったよ。文字など読めなかった」
「そうなんですか？」
「だが今はその外の看板とやらも普通に読めるんだ。不思議だよね」
「言語は・・通じてますよね？一緒では・・・？」
「多分違うはず。ただこの家、空間では同じことを話してるように聞こえるだけじゃないかと思うんだ　よね。」
「・・・・・」
「ここから外を眺めた時にね、見えないけど少し魔術の気配がしたんだよ」
「魔術・・ですか？」
「ああ、貴女と、この部屋は私達の世界へ引っ張り込まれようとし

てると思う」

「貴女もすぐに呪われると思うよ。いや・・・もう既に呪われているのかもね？」

13

呪い　呪われ　振り　振られ・・・・って意味わからん。
自分の思考がちょっとおかしくなってる気がします。

「そうですかぁ・・・」

呪いとやらは恐いと思う。もし女児を出産しても
この手に我が子を抱いてあげられない・・とか　わかっていても切ないだろうなあ。
ま、子供産んだことないんでわからないけどね。

今の問題は・・・家
引っ張り込まれてるって　なんぞ！！！

「この場所は　多分君の世界ではもう認識されてないんじゃないかな？」
「・・目の前に私の世界が見えてるのにですか？」
「うん。ここはもうリッカセイテンの一部になってると思うよ」
「一部・・って・・・でも、でも　私の世界の文明？電気とかガスとか水道とか使えましたけど
　こっちの世界にそれらってあります？」
「その電気やらなんやらの事はよくわかんないけどね。そのうちに使えなくなるんじゃない？」

えーー　困る。

非常に困る。

それこそ生きていけない・・・・。

呪いとかどうでもいいよ。知らないよ！

でも・・・電気は止めないで！

電気ないと・・・・ＤＶＤ見れないじゃん！！！！！！

夏ボーでブルーレイの最新機種に乗り換えたばっかりなのに！！！！

「あとさ・・・貴女は気付いてないのかな？」

「え・・・何が？」

「貴女の思考・・・・駄々漏れだよ。」

！？！？！？

「ひどいよね。人の国の呪いをどーでもいいとか？その電気とやら？がそんなに大事なんだね」

「え、あ、そういう・・わけでは・・・」

「私達の国の住民はその呪いを背負って日々生きてるんだよ？赤子を抱けない母親の気持ち・・

わかるかい？　女児達は産まれて即母親を失うわけだ・・彼女達の愛情の飢えが君にわかるかい？

妻か娘かを選択しないといけない夫の気持ちがわかるのかい？子供か自分かを選択しなきゃならない

母親の気持ちを知っているのかい？残されて生きていかなきゃいけない人の気持ちを知ってるのかい

？」

・・・・・・・・・・・わかるわけない。

だって　今さっき聞かされただけの呪いだもの。

私には関係ない！！って心のどこかで思ってるもの。

「自分には関係ない。興味ない。って顔してるよ？」

「はぁ・・・だってよくわかんないし・・・」

「そうだよね。急な展開だったもんね？」

「話についていけないですよ・・・」

「当事者になればわかるかな？」

「当事者・・・・」

「うんうん」

「え、あっ　それって・・・・・・・・・」嫌な予感しかしない。

「わかるかな？子供じゃなさそうだし・・別にいいよね？」

「いあいあいあ。わかんないですって。きっと良くないです」

「大丈夫だよ。優しくするし・・・私、上手いしね？」

「なにが！！　優しくとか・・上手いとか・・・なんぞ！！」

ゆっくりバイオレットの瞳が近づいてくる。

いやいやいや

まてまてまてこの展開、

無茶ぶりもいいとこだから！！！

これは　あれか！ニサリと同じ展開か！！？

ないわぁ・・・それはないわぁ。

部屋に戻ろう！

急いで体の向きを回転させ・・・ようとしたけど

え・・目の前に壁？？？？

あっちゅー間に　レヤンナジーグに抱きしめられている状況・・っぽい？

マジですか・・・・。

ここベランダです。

一応屋外ですし

部屋に人居ますし

人前でとか無理ですし

そもそも会って即とか無理ですし

つうかこの展開がもう無理ですし

顔をあげたらきっと迫りくるバイオレットの瞳

その展開は断固拒否したい！

下を向き、頭を相手の胸に押しつけ　両手を相手の体に押しつけ抜け出そうと踏ん張る。

「無駄なのに・・抗う姿　可愛いですね」

え・・なにこの人・・・・ドS？

「大丈夫ですよ。貴女を大切にしますよ。・・・死ぬまではね？」

死ぬ事前提で話進めんな！！！！こんちくしょーーー

ベランダでの攻防戦

それを止めたのは　「おい。終わったぞ！」　と言う無骨な声だった。

14

今回は唇、死守しましたよ！！！！

無骨な声に振りかえると　態度も体格もやたらとデカイ銀髪が立っていた。

え・・・この状況に突っ込みナシなの？

この国で女が襲われるのは・・・日常なのか？とんでもない国だな！おい！

「お前の国の少年達は・・・頑張ってるんだな。」

は？　え、なに？それ・・・テニミ〇見た感想？

ねえ、目元赤いけど・・・泣きました？

ねえ、泣きました？そのやたらとデカイ体格で感激とかしちゃいましたか？

もう1度聞きます。

ねえ、泣きました？

ちょっとそこは突っ込んで聞いておきたい。
普通は触れてはいけないのかもしれないけど・・・
私は問いたい。

そのデカイ態度で泣いたんですか？と・・・

まあ、そんな勇気ないんですけどね。

「ふっ　相変わらずケイトは空気の読めない男だね。それじゃモテナイよ？」

「ジーグ、貴様が何を考えてるかなんて知らねえが、そんな貧相な女に手を出すほど飢えてんのか？」

「いや、貧相とかこの際どうでもいいじゃない。女性がこの国に取り込まれるのは大歓迎でしょ」

「ま、俺様にはどーでもいいがな。出来るだけ可愛い姪を産ませてやれ」

「ああ、そうするよ。ケイトには抱かせないけどね」

え・・・なにこれ？馬鹿にされてんの？

子供産む事は決定なの？
つうか・・貧相って・・・こいつら・・・・・・

「おい。お前　次は動物ものがいい」

なんの要求？

あ、ＤＶＤデスカ・・・・。
まだ人の家に居座って観る気ですか。
自己紹介すらまだなのに・・・・・・・・・・
動物物とか・・・何観せればいいんだよ！！！！！

アンパン○ンとか見せてみたいなぁ。
あれは・・動物物とか言い難いけど・・住民が動物だからいいんじゃね？
私の国のヒーローは自分の身を他人に食べさせて餡子をはみ出しながら戦うんだよ。
頭に変えがあるんだよ？なかなかグロいよね。
アンパ○マンやっつけるより　ジャ○おじさん倒した方が勝ちじゃね？
ド○ンちゃんは可愛いと思うのよ。どうかな？
アンパン・・・わかるかなあ？
てか擬人化とかこの国では有効ですか？

まぁ・・・・ＤＶＤなんて持ってないんですけどね！うひゃひゃひ

ゃひゃ

「おい。早くしろ！ぐずぐずするな！」

・・・急かされました。

レヤンナジーグの腕の中をするっと抜け出せた事は感謝します。

だが・・しかし・・・

その態度はどうよ？

声を掛ける一言目が　必ず「おい」ですよ。

目頭ちょっと赤いくせに！このやろう！

いつか　蛍〇墓とか見せてやる。

大泣きすればいい！

嗚咽しながら泣けばいい。・・・泣くのかなあ？普通は泣くと思うけど・・・

この国の常識はどうなんだろうね。

でもまあ、テニミ〇で泣くくらいだ。

きっと「せつこ～～～～～～～」とか言いながら泣いてくれるに違いない。

その姿を動画に納めてみたいもんだ。

「イケメン騎士に蛍〇墓を見せてみた」とか言う題名で某動画サイトにうpしてやる。

泣く姿を全世界に向けて晒せばいい！！！！

ん～　何見せようかなあ～？
ＤＶＤの並んでいる棚を見渡し１本のＤＶＤを手に取る。
「となりのトト○」
日本が誇るスタジオ○ブリですよ。これならいいよね？
ＤＶＤをレコーダーにセットし再生ボタンを押す。

ところでね。

突っ込むのも面倒臭いから視界に入れないようにしてたけどさ・・・
どこから持ってきたのか知らないけど、手足はきちんと縛ってある。
そして鼻と口を手で押さえてるハサリ
そろそろ手を離してあげないと
少年死ぬよ？
切に願うよ。

人の部屋を殺人現場にはしないで欲しいな。

15

「ねえ、ヤナイ」

「・・・なんですか。ハサリ」

「なんで、僕に断わりもなしにジーグに襲われてんのさ」

・・・・・・・
・・・・・・・・・

しらねえよっ！！！！　って切れなかった自分を褒めたい。

何でハサリに断わってから襲われなきゃいけない？
てか、襲われたのは不可抗力だ！
むしろ見てたのなら何故助けない？

で・・なんで私が責められる形になってんの？

すみません
突っ込みどころが多すぎて私には拾えません。

え、なに　私の立ち位置どこが正解なの？

「僕というものがありながら・・もう違う男かい？異世界の女は軽いんだね」

「なにそれ・・・間違い探し？　あえて言うなら全て間違ってるよね。その言動」

「へえー　何がお気に召さなかった？」

「私は　貴方のものじゃないし貴方も私のものじゃない。違う男もなにも・・さっきのは不可抗力。
ハサリとのだって不可抗力でしょ？望んじゃいないわ。異世界の女が・・軽いもなにも・・・
私はまだ誰にもなびいてなんかいないじゃない！」

「ヤナイは僕のものだよ？」

「はあ？そんなわけないでしょ！」

「そうだよ！ボクのもんだもん。」

「「はっ？」」

何故か・・ハサリと私の声が重なった。

「おねーさんは　ボクのだよw
ねーいい加減この紐解いてよぉ～　手首痕ついちゃうじゃん」

可愛い顔してサラッと爆弾発言してるような気がするはちみつ色の少年

「キリーは黙っとけ」

「えー充分大人しくしてたっしょw　ボクもいい加減おねーさんと話したいしー

ねーねー　おねーさんwこれ解いてよ。解いてくれたらボクが皆からおねーさんを守るよ？」

ハサリ1人に手縄にされた身で何言ってんだこの子・・・・・・。

おねーさん　　とか

守るよ　　とか

くりくりした目　とか

上目遣い　　とか

激しく萌えるじゃない！！！！！！！！

年下萌えなんです。
少年好きなんです。
可愛い子大好きなんです。
ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。
変なカミングアウトを聞かせて　マジごめんなさい（（（（（

やだ。ちょっとキュンときちゃったじゃない。
この少年きっと女ったらしになるわよ？
・・・それともう女ったらしなのかしら？

「し、仕方ないなあ～　解いてあげるよ。
べ、べつに守られたいとかじゃないんだからね？
痕がついたら可哀想だからよ？」

千尋は少年に近付き紐に手を掛けようとするがその手はハサリに止められる

「子供の出る幕なんかないだろ　僕ら相手に戦うのか？」
ハサリは何でもないように少年を嘲笑う。

「自分の食いぶちも稼げないようなお子様が　異世界の女性を所望するのか？やめといたほうがいい」
っと言い放ったのは、いつの間にかベランダから戻ってきて紅茶をすすっているジーグ

「まっくろくろすけでておいで～」と小さな声で言ったのはデカイ態度の銀髪

・・・・お前は黙ってろ。聞かなかったことにしてやるから黙ってろ。

「ハサリもジーグも無駄だよ！　諦めてよね！！　あとケイトは黙ってそれ見てて。」

可愛い顔してハッキリ言う子だ。

そして私の気持ちを代弁してくれてありがとう。

「だって、　おねーさんを呼んだのはボクなんだから、ボクの物でしょ？」

あれ？

ナニカ聞こえましたよ。

・・・おねーさんを呼んだのはボク・・・呼んだのはボ・・ク・・？

「お　ま　え　かあああああああああああああああああああああああ」

私はここ数年で1番野太い声で叫んでた。

16

「なにしてくれてんだあああああああああああああ！！！！！！！」

少年の胸倉を掴んで揺さぶった。

手足の紐を解いてなくって良かったと思う
もし解いていてその紐が私の手の中にあったら
・・・・・首絞めてたわ。確実に。

「ヤナイ、落ち着け」
「く・・・くる・・・しいよ・・・おね・・・え・・・さん・・・」
「見事な乱れっぷりだね」
「まっくろく「それはもういい」「黙ってなよ　ケイト」

落ち着け・・・・と？
これを落ち着けと？
今まで必死に落ち着こうとしてたさ　相当頑張ったと思うのよ。

家の前が知らない場所になったり
ドアスコープ覗いたら人の目があったり
見たことないイケメン・・・と思ったら指が６本あったり
そのイケメンに襲われたり
違うイケメンに襲われかけたり
異世界だと言われたり　呪いだのなんだの言われたり

呼び出した・・・ってなにさ？
軽々しく言ってたけど・・・マジでなにしてくれてんのよ。

このわけのわかんない状態を
私の納得のいく形でぜひ説明してもらいたい！！
っつうか　説明しろ！私にはそれを聞く権利があるはず！！！

「手を離せ　ヤナイ」
「それじゃあ　説明したくっても出来ないよ」
「く・・・・る・・・しぃ・・」
「おい。この老女　乳母様にそっくりだぞ！！」

ねえ、あの態度のデカイ奴　今　必要？
いや・・不必要かな？
あいつが空気を読まないのは昔からだ・・すまない。

「・・・いちいち会話に混ざろうとしないでいいよ。ケイト」

私は少年から手を離し　隣の私室へ行くと
ベットサイドに置いてあったヘッドホンを持ってリビングへ戻る。
ヘッドホンをＴＶに繋げ　態度のデカイ銀髪・・・あーもー面倒くさい！！
自己紹介とかしてないから良くしらないけど
「ケイト」と呼ばれてるから　ケイトでいいや。
もうこの際トトロでもなんでもいいけどさ・・

態度のデカイ銀髪はさすがに面倒くさい。
ケイトにヘッドホンを渡し　頭に掛け耳にあてるようにゼスチャーをする。
彼は小さくうなずくとヘッドホンをちゃんと装着した。

よし。

そのまま動くな！　大人しくトト〇を観賞してろ！
今からきっと重要な会話になるはずだから・・・
口を挟まれたくない！
絶対にお前はそこを動くな！
空気、お前はそこで空気になれ！！！！

「ヤナイの世界は不思議な道具で溢れてるんだな」
「ああ。まったく興味深い」
「あーうーあー苦しかった。おねーさん意外に怪力・・・」
「え・・あ・・なんかカーッとなった。ごめんね？」
「いや、まあ・・いいけどさっ」
「キリーが悪いんだから仕方あるまい」
「別に半殺しくらいなら手伝ったのにな」

「・・・で、話を戻すけど　私を呼び出した・・ってなに？」
「え・・そのままだよ。呼びだしたんだ」
「どう・・やって？」
「魔法陣！　まあ、正確にはさ　何の魔法陣か知らなかったんだけ

どね、結果ねえさんの家の玄関が
ボクらの世界に繋がったみたい」

みたい。　みたいじゃねーよ！みたいじゃ！！
「何の魔法陣か知らなかった・・って・・」
「うん。一昨日さあ　王宮の図書館で呪いについて調べててね《呪いに抗う》って本の中からさ
魔法陣の書かれた紙が出てきたんだよ。それを昨日試したらこうなった。」
「へえーそうだったんだぁ・・・・・・・・じゃねえよ！！
こうなった・・じゃない！人を巻き込んどいて何それ！？　呼び出す為に試した魔法陣じゃ
なくって・・・　その魔法陣を試した結果が呼び出し？」
「そうそう。おねーさん付きの家が召喚されるなんて思ってないよ。昨日は失敗したと思ったもん。
それが次の日に成功してるなんてねーふっしぎぃー」
「ある意味失敗じゃない。私にとっちゃ大失敗だよ・・・・」

「キリー、ちょっといいか？」
「ん？なあに？ジーグ」
「本の中から魔法陣を書いた紙が出てきたって本当か？」
「うん。一昨日たまたま見つけたよ」
「・・・何故　魔法師団に見せなかった？」
「え・・・だって試してみたかったんだもーん」
「その魔法陣が　どんなものかもわからずに試したと言うのか？」
「えへへ　だって急いでたし・・」
「何を急いでたと言うんだ？その魔法陣がとんでもないものだったらどうする気だった！」
「どうするもなにも・・・ある意味とんでもないものだったけどさ
無傷だからいいじゃん」

「無傷・・だと？お前らの魔力は枯渇していただろ？普通ならあと1週間寝込むはずだ。
それを治したのは私だ。お前を治す為に魔法師団の4人が3日間動けなくなったんだぞ？」
「えー　ボク頼んでないしー　そんなの知らないよぉ」
「ほぉ　わかった。お前の友人達にはあと1週間寝込んでもらおう。ついでに・・・キリー
お前にもまた寝込んでもらおうかな？」
「ちょ・・やだよ！」
「ちょっと外に出ようか？」
「え・・・まったまった。嫌だって！ジーグ！！」
「ハサリ　手伝ってくれ」
「面倒臭いなあ・・・」
「ハサリ？」
「・・・おっけー　わかったよ。外連れてきゃいい？」
「ああ、頼む」

ハサリは少年の首根っこを掴み玄関へ向かう。
その後ろを妙に楽しそうな嫌な笑顔のジーグがついて行った。

・・・・取り残されました。

あれ？思わぬ展開だ。

今のうちに鍵閉めちゃえ！！！！！

急いで玄関へ向かい彼らの出て行ったドアのカギを閉める。チェーンも忘れずにね（

「はあああああああああああああああああああああああああああああ」

思ったよりも大きなため息が出た。

うーん・・・・・いい加減　カップ麺でも食べよう。
これからのことは食べてから考えよう。
考えるのも・・・ダルイなぁ

食べて　お酒飲んで　とりあえず寝ようかな。
1回寝よう。そうしよう。
もう今日起きたこと全て忘れたい。
飲んだくれて寝よう。
それがいい。そうしよう。

頭の中にはそれしかなかった私は

リビングに戻って

膝から崩れ落ちる。

完全に忘れてたよ。

‘空気’が居ることを・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

17

リビングに戻って　空気となったケイトを見た時は
一瞬だけど　忘れて居た自分を殴りたくなった。
ＤＶＤが流れている画面を見ると　もうストーリーは終盤。
こんなところで電源を落とすほど鬼畜じゃない
私はキッチンへ向かい冷蔵庫の中身を確認することにした。
冷蔵室を開けると
キムチ　缶ビール　調味料類　消臭剤　　以上！！
あまりに心もとない冷蔵室の中身
だ、だって仕方ないよね。今日買いだしに行く予定だったしさ・・・
気をとり直して冷凍庫
うん。ここはたんまり貯めこんである。
焼きおにぎり　からあげ　ホウレンソウ　ｅｔｃ・・・
職場にお弁当持参派の私は冷凍食品は必需品
３日前　近所のスーパーが冷凍食品５割引きデーだったことが大きい。

野菜室・・・　は　カラです。

でもね。そこのはじっこにある段ボール
その中に１０ｋｇ　じゃがいも入ってるのよ。
北海道から届いたの。
１人暮らしに１０ｋｇのじゃがいも・・・って・・・
新手の嫌がらせか？と思ったけど
友人の北海道土産です。

一人暮らしに不似合いな　大型冷蔵庫
冷凍食品を貯めこむだけに買い込んだ代物
めっちゃ役に立ってます。

しかし・・だ　さっき聞かされた電気が止まるかも？と言う仮説

これ食べちゃった方がいいの？
食べなきゃダメなの？

電気止まったら　冷蔵庫も電子レンジも　アウト？

ふぬ。食べるか。

冷凍庫から焼きおにぎりや唐揚げを電子レンジで温める。

キムチはそのまま食べたい。

段ボールからジャガイモを数個取り出し丸ごと洗いそのまま塩を淹れたお湯でさっと茹でる

それを取り出し　簡単に切って揚げる。
ま、よーするにフライドポテトだ。
冷凍のホウレンソウを解凍しバターで炒める。

・・・・・・・なんだろうこの安居酒屋的簡易目メニュー

キッチンでちょこまかと動いて居たら
ＤＶＤが終わった事を　ケイトが伝えに来た。

「おい。終わったぞ。」

「あー　おっけー　　で、帰る？」　つうか　帰れ。出てけ。二度と来るな。

「あ奴らは・・どうしたんだ？」

「んー　なんかキリー？をどうのこうのする・・って出てったよ」

「どうのこうの・・？　ふん。俺様には関係なさそうだな」

「関係ないか・・あるか　知らないけどさ・・・　用がないなら出てってくれないかな？」

「なぜお前に命令されなきゃならねえんだ？」

「・・何故・・ってここ私の家だし　これは命令じゃなくってお願

い」

「それらは　お前の世界の食べ物か？」

「え？ああ　うん　私の夕食兼昼食兼朝食兼おつまみです。」

「よし。わかった　俺様も食ってやる。」　と言い残し　ケイトは
リビングへ戻って行く

え？は？え・・・？　何この脈略のない話の流れ方
出て行って欲しい・・とのお願いは　完全無視したよね？
あ？あいつ　食べるの？　決定事項なわけですか？
あれ？私いつ承諾した？
あのデカイ体格って・・・どんだけ食べるんだろう・・・・・

別に納得したわけではないけれど
料理を少し増やす　まあ、料理って言っても冷凍食品ですけどね！
それでも足らない！とか言われたら　今度こそカップ麺だな。

でもやっぱり　なんか納得できないので

舌、火傷すればいい！！！と思いながら
奴用の焼きおにぎりだけ少し時間を多く温めた

「ねえ　これそっちのテーブルに運んで」　（ちょっとは動け）

「お前がやればいいだろう」

「私一人じゃ冷めちゃうでしょ。美味しくなくなる」（いいから動けよ）

「ふぬ・・お前はトロそうだしな。しかし人に物を頼む態度ではないな」

「手伝って下さい　お願いします」（くっそお。このやろう・・・・）

「これらを運べばいいのか？」

「うん。お願い。そこのテーブルに適当に乗せて下さい」（なんでもいいからとっとと動けよ！）

そんなこんなでテーブルに食事の用意が終わった時
ベランダから見える景色は　夕暮れだった。

昼食にしては遅すぎるけど
晩酌には早すぎる　わけのわからない食事

料理を見つめる瞳が妙にきらきらしていやがるケイトを横目に
私は手酌で缶ビールをコップに注ぐ

「おい。とうもころしはないのか？」

そんな言葉を軽くスルーしつつ

一応、ケイトの分も缶ビールを注いだ。

アルコールくらい飲めるよね？

18

ジーグは　ヤナイの部屋を出た後
ハサリに抑え込まれてるキリーを簡単な魔術で眠らせた。

他人の魔力を抜いたり供給したり
実際簡単な魔術ではない。結構な体力と魔力を使うのだ。

魔力が枯渇して寝込んでいたキリーに魔力を供給して治したのはジーグ
しかし彼は自分の体力と魔力をほぼ使っていない。
部下を４人ほど間に入れ彼らの体力と魔力でキリーを治した

では・・今度はキリーから魔力を抜くとして
また部下を犠牲にするか？

・・・副団長から　怒られるだろうな。

ただでさえ　魔法師団は人員が少ない。
その中でもうすでに４人ほど犠牲にしている
そしてまだ魔力が枯渇して寝込んでる小僧共が５人も居るのだ
部下を２人づつ犠牲にするとしても１０人必要になる。
ここでキリーの魔力を多少抜いたところで
それに必要な人員・・・など　許されそうにないのが現実

副団長・・・うるさいしな。怒られるのも面倒臭いしな

「ハサリ」

「ん？なにさジーグ」

「キリーを自室に連れていけ」

「え、俺が？」

「他に誰がいる？」

「・・・おk」

「ベットに寝かせたら　助骨の１つでも折っておけ」

「ジーグも結構ひどいよな」

「しばらく眠りは深い。起きた時痛がればいい。そのうち気が向いたら治してやる」

「わかった。俺はキリーを部屋まで運ぶけど　ジーグはどうすんの？ヤナイの部屋に戻るのか？」

「いや。とりあえずは魔法陣の事を副団長に報告して　キリーの言ってた本を調べてみる」

「・・・ケイトと２人っきりだけど　ヤナイ平気かね？」

「大丈夫だろう」

「まあ、ケイトだしな」

「ふぬ。ケイトだからな」

「まあ、でも、俺　キリーを置いたら　ヤナイのとこに1回戻るわ」

「好きにしろ」

「じゃあキリー重いしもう行くよ」

「・・・ヤナイに手を出すなよ？」

「さあ？」

「あれは　私のものにする」

「本人の意思しだいじゃない？」

「ああ。わかっている。私がハサリに劣るわけがないだろう？だから決定事項を伝えたまでだ」

「・・・・・・・（好きに言ってればいいさ）」

「無駄話をしたな。私ももう行く」

「あー　はいはい。」

「キリーを頼んだぞ」

「わかったさ。早く行きなよ。魔法陣については早く報告したほうがいいんでしょ？」

ジーグは　軽く頷くとさっさと広間を出て行った。
ハサリも深い眠りについたキリーを抱え広間を後にする。
出来るだけ早くここへ戻り　ヤナイの部屋へ上がり込みたい。
いくら「ケイト」とは言え　２人っきりってのは　気に入らない。
別に　「ヤナイ」に惚れたわけではないと思う
確かにこの国には居ないタイプの女性だ。
でもただそれだけ・・だ。
美人だとか可愛いとか　そんな感情はもたなかった。
魅力的だとか　好みだ・・とかももちろんない。
自分を見て　「苦虫を踏みつぶしたような顔」をした印象しかない。
でもなぜか　ケイトとヤナイを２人っきりにさせておきたくない。
という気持ちが湧きあがってきた。

19（前書き）

ケイトのターン（笑）

19

そうそう。

うん。

いい感じじゃない？

あ～ぁ　でも　今日　雨じゃないしなあ。

ちょっと可能性少ないかもよ？

只今

ベランダで大男（ケイト）が私の傘（花柄）をさして

トト〇　オア　猫バ〇　を待っております。

あいつ　簡単に騙されたよｗｗｗｗｗ

ベランダから見える遠くの山を指さして
「あそこが　トト〇の居る森だよ」って大ボラこいたのが始まりです。

食事の風景・・・・聞くんですか？知りたいですか？
正直言いたくありません。
感想的には・・小一時間で疲れました。　以上！

で　終わらせちゃダメですか？ダメですよね。はい。ごめんなさい。

ビールでね　乾杯をしたんですよ。

一口飲み込んだ瞬間にね
あいつ・・吹き出しやがったんですよ
炭酸が初めての体験だったみたいで
ゴクっ　ブハーーー　みたいな見事な吹きっぷり。

「おい。なんかしゅわしゅわするぞ。これ」

なめんなコノヤロウ。

並べたばかりの食事の3分の1が　奴の吹きだしたビールがかかったんです。

どんだけ一口目　口に含みやがったんだよ
始めてのものなら　もう少し警戒して飲みやがれよ
奴の吹きだしたものを布巾で綺麗にしてやってるのに
あいつはその事に何も言わず　食べ物を吟味してやがりましてね

「この2本の棒をどうしろというんだ！」
「こんなもの使えるか！！！」
「おい　これはこのまま食うのか？下品な世界だな」
「熱すぎるじゃねえか！」
「あ、でも香ばしくてうまいな」
「この赤いソースはうまい」
「しゅわしゅわしない飲み物を寄こせ」
「で、とうもころしはどれだ？」
「この茶色いのもうまいな」
「お前らの世界じゃ草を食うのか？」
「で　とうもころしはどれだ？」
「・・辛いじゃねえか。まあ、嫌いじゃねえがな」
「おい　この飲みモンもっと持ってこいよ」
「で　とうも「とうもろこしならないわよ！！！」

箸の文化はやはりないらしく　箸の質問から始まったんだけど
・・・質問するけど答えは聞かない的な態度です。立ち悪い。
焼きおにぎりを素手で持つのも信じられなかったみたいだけど
箸はどうせ使えないので　素直に手で持った。熱かったらしい。ざまあ。
赤いソースはポテトフライに添えたケチャップです。
ビールはお気に召さなかったらしいので　日本酒（安酒）渡しとい

たよ。
茶色のは唐揚げ、草はホウレンソウ　なんだかんだ言いながらも
全部美味しそうに食してた。
ただ　口を開けば数回に1回　とうもころし　を聞いてくるのはう
ざかったけど
トト〇を見せてしまった私にも責任ある・・・ような気がしないで
もない。
用意した料理は明らかに足りない。
私の口に入る前に8割奴の腹の中
結局　カップ麺を2つ作る。
その「かやく」の中に入っている干からびたトウモロコシを発見。
わざわざそのトウモロコシを箸でよけ　お湯を少したらして　ふや
かした。
それのみを　小皿に盛り（盛るっったって数個だけど）
「これ・・・トウモロコシ。すごい貴重で高価なのよ？特別よ。大
事に食べてね」っと
えらいもったいぶってケイトの前に差し出す。
なんかね　横柄な態度が急に少し変わってね
「そうだったのか。すまねえな」
なーんて素直に言うケイト。

・・・あれ？こいつ騙しやすいんじゃね？

まあ、テニミ〇で泣く位だし　まっくろくろすけは呼んじゃうし
態度と体はデカイけれど・・・・

他の面倒臭い王子達の中で１番単純で扱いやすいんじゃね？

なんて事を思ったら　行動を起こさずに居られなくなった。

フォークでカップ麺と格闘してるケイトを横目に玄関へ向かい
数本ある傘の中から１番派手で可愛い傘を選びそれを持ちリビング
へ戻る。

たかだか２～３分　席をはずしただけだと言うのに
カップ麺はもうカラだったのは仕方ないのか・・どんだけ食うんだ
ろう奴
食費・・請求していいですか？いいよね？
・・・まあ、それは今は置いておこう。

ベランダに出て　ケイトを呼ぶ。

「あぁ？」と言いながらも奴は素直にこちらへ来た。

「あのね　ほら　あそこ　わかるかな？　あの森」

もう日は落ちていて　ほとんど目視出来ないけれど　遠くの山を指
さした。

「あれが、なんだ？」

「他の王子達に内緒にできる？ケイトだけに教えてあげたいの」

「ああ、誰にも言わねえ」

「あそこね・・・・・・・・・・・・トト〇の森なのよ」

「な・・あそこがそうなのか？」

「うん。ここでね　この傘を持って　待ってると時々、本当に時々
ごく稀にだけど・・・」

「現れるのか？」

「・・うん。内緒よ？」

ケイトは喉をゴクリと鳴らし頷く

その結果がこれだよ。

ベランダで傘を持つ大男の出来上がり。

いやあ　簡単だった。

ベランダでドキドキしてる様子。
なんとも・・わかりやすい。

私は誰も居なくなった部屋（正確にはベランダに人がいるけれど）で
少し伸びかけたラーメンをすすり
ビールを片手に　タバコをふかした。

ふううううううううううううううううううう

なんかやっと　一息つけた気がする。

これから先・・・どうなんのかな・・・・・

１９（後書き）

ケイト推奨　騙しまくりたい。
ラブ要素ってどうやったら出るんですかね？
おかしいな。こんなはずじゃなかったのに・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3823x/

ホワイトリエール９０５

2011年11月5日04時02分発行